

本心

ナタシャ ワンダ アリアー
日本語・日本文化研修留学生 インドネシア

私の「心」の絵がついた本は靴の中に眠ります。そして夜になったらその本が起きて、無邪気な目で私を見つめています。それは、小学校のころの友人たちが描かれている本です。

小学生の私の趣味は絵を描くことでした。授業中でも、昼休みの時でもいつも一人だけの世界をペンで描いていました。そんな私のために日本の漫画が好きなおばちゃんが「ドラえもん」という漫画をくれました。あれは古くて、傷んでいる一冊だけれど、私にとってはかけがえのない宝物になりました。気づいたら本の後ろやページの余白に、私が描いたキャラクターのらくがきでいっぱいになりました。ドラえもんとのび太が住んでいるページの余白に友達が増えて、みんなが仲良く遊んでいます。カッコいい忍者と銀河を旅するロボットと雷を出せる黄色鼠は皆鬼ごっこをして遊んで、とても楽しく見えました。あの頃の私の友人は彼らだけでした。そして、私たちの友情関係は高校を卒業するまで続きました。私のそばで12年間を過ごした友人達は私を否定することも、傷つけることもできないからです。



今この作文を読んでいる皆様、ピーターパンの話を知っていますか？ピーターパンの話の中にネバーランドという魔法の場所があります。その場所は、いつまでも大人にならない子供たちが毎日楽しく過ごす島です。アニメの中でしか日本のことを知らない私にとって、「日本」という国はまさに^{ネバーランド}楽園でした。日本の中ならどんなに変な人でも皆に受け入れられて、どんなに悪い人でも許しをもらえて、どんなにおかしい子でもハッピーエンドを手に入れます。そして、どんなに寂しい子でもきっと受け入れられる国だと思っていました。

高校に入った私はアニメのおかげでしっかりアイデンティティを形成することができました。アニメが好きではない人なら近づかないし、遊びに行くより家でアニメを見るほうが嬉しかったです。しかし、そのような「日本」は私の幻想にしか過ぎませんでした。

それは大学に入ってから気づきました。日本語や日本文化を学び続けると理想の夢はどんどん壊されました。私のネバーランドは夢にしか存在しないということに気づき始めました。そして、ピーターパンの夢から覚めたウェンディは生き続けなければなりません。

その時に学んだことは日本の習慣でした。日本はどの国にもあるように悪いところもありました；建前があるが、いじめもあります。勤勉はあるが、死ぬほど働く習慣もありま

す。絶対に樂園ではないが地獄でもなかったということが分かりました。しかし私の周り
にいる人々によれば、日本人は「寒いロボットのような国民」からできている「ロボッ
トの国」とよく言うそうです。

その寒さが日本人の特性だということをいつも聞いているので、実際に和歌山大学に留
学生として受け入れられたとき「恐怖」という深い穴に落ちました。ロボットの国へひと
りきりで行くのは気が乗らなかったけれど、それは私が選んだ道なので、勇気を出して飛
行機に乗って来ました。空の旅の後、私はまだ恐怖を感じたまま日本に最初の一步を踏み
出しました。



実際踏み出してみると、足元はた
だのコンクリートでした。上を向く
と、そこにはいつもと同じ青い空が
ありました。その時初めて、「日本」
という国はただの普通の国だとい
うことに気づきました。その後私は
いろいろな人と出会って、友達を作
りました、そしてこれだけは自信満
々に言えます：日本は普通の国だ
ということです。ここには世界の平
和を守るために戦うスーパーヒー
ローは

いないが、ロボットのような市民もいません。

私は人間について気付いたことが一つあります。情報不足になったら、人間はいつも「恐
怖」か「憧れ」を感じています。その感情はある国・民族・神に向かっています。日本を
あまり知らない私の感情と同じです。この人間の本性を乗り越えるためには情報を集めて、
その「何か」を学ぶしかないと思います。

このことを忘れないように、私は毎晩心の絵がついた本をカバンから取り出し、今日も
日本について学んだことを描きました。

True Heart

Natasha Wanda Aryand
Japanese Studies Student / Indonesia

When people are uninformed, oftentimes their reaction to the unknown would be baseless fear or admiration. Countless precedents point to this conclusion, from the fear that gave rise to Nazi Germany to the admiration that gave rise to religious fanaticism. Until now my feeling for Japan swung between the two extremes; a blind admiration borne of a childhood spent watching anime and blind fear borne from learning only the dark side of urban Japan. I found that the only way to overcome these unfounded beliefs is to learn about what I don't know and to keep learning.

Hati Tulus

Natasha Wanda Aryand
Mahasiswa Studi Jepang / Indonesia

Seringkali reaksi orang banyak terhadap hal yang tidak sepenuhnya mereka mengerti adalah rasa takut atau rasa cinta tanpa basis. Sudah banyak terjadi tragedi dikarenakan ini, mulai dari rasa takut yang melahirkan Nazi Jerman dan cinta buta yang melahirkan terorisme atas dasar fanatisme agama. Saya telah merasakan keduanya terhadap Jepang; cinta fanatik yang lahir dari masa kecil monoton anime dan rasa takut karena mempelajari bagian terburuk dari negara Jepang modern. Saya menemukan bahwa satu-satunya cara melampaui kepercayaan tak berbasis seperti ini adalah dengan mempelajari hal yang tidak saya mengerti secara berkelanjutan.